廃城奇譚

南條範夫

双葉文庫

廃城奇譚

南條範夫

双葉社

目次

宇都宮城の間道　七
亀洞城の廃絶　二五
高山城前史　五四
横尾城の白骨　七六
地獄城　一〇九
霧の城　一四〇
奇怪な城主　一七一
三度死んだ城主　二〇二
藩主消失　二二一
帰雲城三代　二四八
戦国謀殺　三〇二
あとがき　三五三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

廃城奇譚（はいじょうきたん）

宇都宮城の間道

一

慶応四年四月十一日、官軍は、一弾も発する事なくして江戸城に入った。

しかし、幕軍の凡てが、この平和開城に賛成していたのでない事は、いうまでもない。

海軍側は副総裁榎本武揚が、官軍に引渡す約束の軍艦七隻を率いて逃亡、陸軍側は秋月登之助、大鳥圭介の率いる伝習隊以下の各隊二千五百が、市川に集結して、再挙を図る。

この市川に集まった各部隊は主将として大鳥圭介を、参謀として土方歳三を選び、まず日光山に赴いて東照宮の神廟に謁し、奥州に下って、会津以下の列藩の力をかりて、あくまで官軍と抗争する決意である。

十二日早朝、早くも市川を発し、宇都宮に向った。

途中、幕兵の脱れ来るものを加え、意気頗る揚った。

十六日及び十七日、小山付近で、官軍に属した結城・宇都宮・彦根各藩の兵と闘って大いにこれを破り、先鋒となった秋月登之助の第一大隊は、十九日朝、宇都宮に迫った。

時に、宇都宮を守っていたのは、戸田越前守忠恕である。

忠恕は、既に四年前、大平山事件の責を問われ、いまだ若年にも拘らず家督を忠友に譲って、江戸藩邸に隠居していたのであるが、藩主忠友が、京へ上っている留守中、江戸開城問題が起ったので、藩中を統轄するため、とりあえず宇都宮に帰城していたのだ。

城兵の主力は、小山鹿沼方面に出動していたので、城内には僅か二百五十名の藩兵と、他藩の応援軍百五十名、合せて四百名余りしかいない。

賊軍迫ると聞いて、軍事奉行戸田朽弦が一隊を引き連れて、宿郷辺に敵を迎え撃ったが、衆寡敵せず、城に逃げ戻った。

賊軍は急追して、宇都宮城の墨壁に迫り、大いに小銃を発する。

城方は、小野森御門付近と、本丸の巽櫓下に銃列を敷いて防戦し、戸田朽弦父子、石原五郎左衛門、天野六郎、佐藤銀之助ら、城門を開いて突出し、槍を揮って闘った。

だが、勝に乗じた賊軍の勢は凄じく、石原、天野ら、相次いで戦死し、銃丸は忠恕の居館にも、雨の如く飛来する有様である。

夕刻になって、薄闇の訪れると共に、漸く攻撃軍の手は緩んだが、勝敗の帰結は、もはや明白であった。

中老県勇記と戸田朽弦とは、忠恕の前に進んだ。

「残念ながら、当城を、明日中持ちこたえることは不可能かと思われます」

県勇記が言う。

忠恕は、色の白い、痩形の、眼の大きな青年である。利かぬ気の、濃い眉をきびしく寄せて、

「落城やむを得ぬとあれば、城を枕に討死するまでだ」

「それは御短慮というものでございましょう。城兵の精鋭悉く小山方面に出払っておりますた

め、空しく敗れをとりましたが、ひとたび開城しましても、これを奪回することは必ずしも不可能ではありません」
「降伏して城を開けば、余は腹を切るほかはあるまい」
「開城必ずしも降伏を意味しませぬ」
「どういう事だ、それは」
「殿はじめ、城兵一同、城を脱出すればよろしうございます」
「四方を、賊軍に囲まれているのだ、そんな事は出来ぬ。もし、囲みを衝いて、脱出するとすれば、過半は討たれるであろう」
　県勇記は、六石と号し、文武両道に達する宇都宮藩の柱石だ。先に、藩論が、勤皇佐幕両派に分れて、異論百出した時、これを勤皇方にとりまとめ得たのも、この勇記の力である。
　宇都宮城の内外についても、若年の藩主以上に詳しい。
　忠恕の言葉を聞くと、奇妙な微笑を洩らして、言った。
「御案じなされまするな、無事脱出の手段がございます」
　懐中から、いとも古びた巻物一巻をとり出して、
「これは、代々、当藩家老職の家に伝わりますもの。当家存亡の危機に臨みたる時のみ、開き見るべしと誡められております。私、これを、家老藤田左京殿からお預かり致しておりましたが、昨夜、当家存亡の秋と存じ、打開いてみましたが、とくと御覧下されい」
　忠恕は、それを受取って、開いてみていたが、驚異の眼を輝かして、
「これは、余も全く知らなんだ、愕くべきことだ」
　と言って、戸田朽弦に手渡した。

受取った戸田も亦、一見して、眼を丸くした。
その秘巻に、どのような事が記されていたかは、不明である。
その夜半に至って、忠恕は、生残った城兵二百五十余名を二の丸広場に集め、殿舎の玄関前に草を積んで、火を放った。
忽ち燃え上った火焔は、月のない闇空に壮大な柱をつき立て、西に東に拡がり、城内の建物の一つ一つを紅の舌で覆ってゆく。
夜襲を警戒して、一応城外に退いて包囲陣を布いていた攻撃軍は、これを見て、
「おお、城が燃えるぞ」
「城が陥るぞ」
「脱走の兵を残らず、討ち取れ」
と、一斉に行動を開始し、落武者を求めて、再び、城壁の下に肉薄した。
だが――意外にも、燃え上る城を脱れ出て来る姿は、全く見当らないのである。
建物の焼け落ち、崩れ落ちる轟音と、風に交る焔の唸りが聞こえるのみだ。
「変だぞ」
「城兵凡て、火中に入って死んだのか」
「一気に攻め入れ」
と、打ち騒いだが、ものすごい火勢と煙とに押し返されて、とても城内に乗り込むことなど出来ぬ。
異様な一夜が明けた。
暁方、風衰え、火の手がやや収ったので、賊兵は、大手から城内に突入した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

残兵の不意打ちを警戒しつつ、城内を隈なく捜索したが、驚くべし、ただ一個の屍体すらないのである。

否、人の屍体ばかりでなく、当然あるべき筈の馬の死骸も、全然見当らない。

少なくとも二百以上と推定される生き残った城兵と、これにふさわしい数の馬匹とも、忽然として、消え失せてしまったのだ。

まだ建物の残骸が、ぶすぶすと燃え、土を踏む草鞋の裏が焦げるような中を、突入部隊の隊長秋月登之助は、不審の面持で歩き廻っていたが、突然、大声に叫んだ。

「解ったぞ」

駆け寄った幕僚たちに向って、

「おい、手分けして、城下の民家を一軒残らず、焼払え」

と命じた。

一同は、愕然として、秋月の顔を打仰ぎ、躊躇した。主将大鳥圭介から、きびしく戒められていたのだ。

――合戦に当っては、規律を正しくし、一般庶民に対しては、なるべく損害を与えぬようにせよ。

城の陥ちた今、何のために、民家を焼いて、庶民を苦しめるのかと、怪訝そうにしている部下に、秋月は言った。

「城兵共は、昨夜、闇に乗じて城外に出、民家の中にひそんだのだ。機会を窺って、わが軍を奇襲しようと企んでいるに違いない」

ああ、そうか――と、一同もうなずいた。

そういわれれば、それより他に、城兵の奇怪な消失を説明し得ないのだ。
賊兵は忽ち、城下に散って、町々の家々を片端から焼いて廻った。
だが、再び、意外にも――それらの燃え上る家々からは、逃げ遅れて隠れていた僅かの町人、女子供が、わめき騒ぎつつはいずり出て来ただけで、城兵らしいものは、ただ一人も現われなかった。
昼少し前、入城して来た大鳥圭介は、城下の人家が燃えているのを見て眉をひそめたが、秋月から事情を聞きとると、
「解し難い事だ」
と、首をかしげた。
圭介はこの不審をこの後しばしば述べている。
そしてこの奇妙な事件については、今に至るまで、何人によっても明白な説明がなされていない。
宇都宮落城までの日々について、詳細な日記を残した県勇記でさえ、その当日の事については、ただ、
――今日、落城す。
と、一行、記しているのみである。
城攻めに加わった賊軍の中にいた桑名藩士西島幸之助が、家郷に送った書信の中にも、
――夜半、煙焔天に漲り、城陥つ。暁に至つて、先登、城に入る。驚くべし、城兵の影なく、死屍の残されたるもの、亦無し。奇と言ふべき乎。怪と言ふべき乎。
とあり、同じく第二大隊に属した旧幕臣石本常次郎の手記には、

――未明、壬生（みぶ）街道に向って脱走する一団あり、急追して斬る。皆、彦根、壬生の藩士のみ、宇都宮藩の士、一人もこれ有るなし、

とある。

援軍に来ていた他藩の兵は、若干脱出したらしいが、宇都宮藩兵は、忠恕もろ共、城内から、一応完全に消失したことは疑いない。

しかもこの宇都宮城は、三日の後、官軍の為に奪回された。

奪回軍の主力は、土州と因州の兵であったが、その他に、少なからぬ宇都宮藩士も混っていた。

それも、小山方面に出動していた藩兵ではなく、城中に籠って、火焔の中に消失した筈の藩兵であったと言う。

二

大正末期から、昭和の太平洋戦争期にかけて、宇都宮市内では、明らかに関連のあると思われる事件が、十数回に亙って見られた。

その最初は、小伝馬町から、本郷町に通ずる道路が、十数間に亙って、突如、陥没したことである。この時は、単なる地盤のゆるみによるものと、解釈された。

それから数年後、西学校の南通りの屋敷裏、もと竹藪のあったあたりに、大きな穴がぽっくり開いた。

この時も、関係者一同は、不思議に思ったものの、前の陥没と関連して考えることはなかった。

ところが、それからまもなく、材木町のNという酒屋が倉庫を建てた時、地盤が落ち、東から西に向って通じる横穴のようなものが発見された。

高さも幅も、人が馬を牽いて通れるぐらいあり、長さは三間位である。

たまたま、その際、近くに住んでいた高津香太郎と言う中学校教諭が、その穴を見て、不審を抱いた。

行詰りにはなっているが、決して横穴でなく、本来ずっと長くつづいた地下の間道ではないかと考えたのである。

この時始めて、前掲の二例も併せて考慮され、三者が連結された地下道の一部なのではないかと言う疑問が出された。

地下道であるとすれば、それは当然、宇都宮城内からつづいていたものに違いない。

――慶応四年四月二十日の落城の際、忠恕以下二百の藩兵が、火焔に包まれた城中から、消失し去った維新史上の謎をとく鍵が、ここにあるのではないか。

高津はそう考えて、熱心に調査を始めたのである。

古記録は、いかに探っても、何ら得るところがなかったが、それは当然であろう。

彼は専ら、旧藩時代の地形を調べ、古老の言を聞いて廻ることに主力を注いだ。

その中にも、地下間道の存在を立証する穴が、幾つか、発見された。

最も大規模なものとしては、三条町の、通称ネズミ穴の北、H法律事務所の東側の家の庭が全面的に陥落し、東西に通じるかなり長い地下道が現われた。

これらの陥落個所や、抜け穴をつないでみると、城内のいずれからか出た間道が西に向っていることが推察された。

高津は、そこに思い当った時、殆ど忘れ去っていた少年時代のある記憶を、頭の中に蘇らせたのである。

彼は、少年時代を宇都宮市の西端、西原町で過ごした。

西原町からは、長坂を経て鹿沼に至る街道が、西に向って走っている。

その街道には、松並木が残っていて、彼は仲間の少年たちと、よく、松ぼっくりを拾いに行ったことがあるのだ。

街道に沿って、かなり大きな穴があり、その中に、乞食の親子が住んでいた。

子供心にも、よくこんな穴に住んでいられるものだと感心していたが、或る日、乞食の親子の姿が見えない時、好奇心からその中を覗き込んだ何人かの子供たちが、

「随分、奥が深いぞ」

「すごい穴だな、自分たちで、掘ったんじゃろうか」

と、顔を見合せた。

それを、突然、思い出したのだ。

間道は、西原町の鹿沼街道に向って造られていたのかも知れぬ。

古図を調べてみると、今の西原町の辺りは、旧幕時代には、藩の下士連中の組屋敷があり、その外れから鹿沼街道になっている。

高津は、胸を躍らせて、少年時代の憶い出の個処に行ってみた。

勿論、乞食の穴はなくなっていた。杉並木もなくなっていた。いや、それどころか、その辺りは、職業紹介所や、宇都宮学園の敷地になって、旧状をしのぶよすがは全くない。

しばらくは、がっかりして、街上に立ちつくしたが、熱心な郷土史家に特有のこまめさで、そ

の近辺から、一ノ沢町、睦町一帯にかけて、丹念な聞き込みをやり始めたのである。
聞き込みは、春休みを利用して、三日に亙って続けられた。
三日目の夕方、睦町の外れの古い農家で、思わぬ収穫があった。
その当主が、つい近年八十幾つかで死んだ父親の又助から聞いたと言う話を聞かせてくれたのである。
又助の話は、次のようなものであった。
慶応四年四月十九日夜、当時十七歳であった又助は、隣村の百姓平衛門の娘のちぬの許に夜這いに行った。
城が囲まれ、今にも落ちるかと思われる時に、夜這いに行くとは、甚だ不心得でもあり、又、かなりの危険もあったのだが、青春の情熱は、如何とも止め難かったのであろう。
ちぬの寝床の中で、愉悦極まる一刻をすごした時、
「火事じゃ」
「お城が燃える」
と言う声を聞き、愕いて飛び起きた。
慌てて下帯をしめ直し、衣類をひっかけて裏木戸から飛出し、我が家の方へ走って行った。
畑地を横切って、鹿沼街道に出ようとした時、総身に冷水をぶっかけられた如く、身をふるわせて立止った。
街道の傍の宗栄寺と言う小さな森の中の寺の境内から、奇々怪々な、幻の如き行列が出て来たのだ。
あたりが暗いので、顔は勿論、服装もはっきりとは見えないが、どうやら武装をしているらし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com